THE BOOK REVIEW PRESS
図書新聞
3374号
2018-11-10 土
〒169-0075東京都新宿区高田馬場3-13-1 ノークビル3階
電話03(5937)3918 FAX03(5937)3919
購読料（送料共）1年48週12000円 半年24週6480円 振替00180-2-67348
http://toshoshimbun.jp
定価260円（本体241円）
発行　武久出版(株)©

シグナ .com
企画◉編集◉デザイン◉校正◉校閲
出版・広告用の印刷データ制作
http://www.signa-signa.com
東京都豊島区東池袋3-1-1
サンシャイン60　45階
TEL：03-5979-2183
E-mail：signa@signa-signa.com

の来し方に心澄む秋

1～3面

松山巖氏インタビュー『本を読む。――松山巖書評集』（西田書店）

本の力が落ちたいま、中継走者は何を書評するか

松山巖

MATSUYAMA Iwao

▼松山巖著『本を読む。――松山巖書評集』6・20刊、A5変型判八九四頁・本体四六〇〇円・西田書店

先ごろ西田書店より、松山巖氏の『本を読む。――松山巖書評集』が刊行された。一九八三年から二〇一六年まで、三三年にわたって新聞や雑誌に書き継いだ、五四一冊分の書評を集成した九〇〇頁近い大著である。松山氏は読売、毎日、朝日三紙の読書委員や書評委員を務めた稀有な書評家であり、書評した本のジャンルは都市と建築、美術と文学、歴史と評論など、実に多岐にわたる。そうした書評群を収めた本書には、一九八〇年代以降の時代の推移や変化をも映し出す、その時々の代表的な本を論じた〝本の事典〟の趣がある。

本書を手がかりに、三〇年以上におよぶ書評の歩みをめぐって、松山氏に話をうかがった。（9月10日、東京・六本木にて。聞き手・米田綱路（本紙編集））

書評委員になって出会った人々

――一九八三年に『カメラ毎日』に書評を書かれて以来、ずっと書評を書き継いでこられました。

松山　こんな分量になるとは思いませんでした。ただ、これでもあと五〇冊分くらいは足りないと思います。先日もアーサー・ビナードと小沢信男さんの対談「日本語と私」（九月二日、東京・両国のシアターXで開催）を聞いて、そのことを人と話しているうちに、以前にビナードの本の書評を雑誌「考える人」に書いたことがあるなあ、と思い出しました。

――ビナードさんのどの本でしょうか。

松山　ビキニ環礁の水爆実験で被曝した第五福竜丸事件を絵にした、ベン・シャーンを主題にした本で、ビナードが著したものです。『ここが家だ――ベン・シャーンの第五福竜丸』（集英社、二〇〇六年）だったと思うんですが、どうもはっきりしない。

そういうことは他にもずいぶんあるんです。共同通信に頼まれて書いた書評も、ここには入っていません。いつ頼まれたか分からないし、配信されて地方紙に載るので、いつ載ったかはっきりしない。建築雑誌の「建築文化」に書いた書評もあるのですが、やはりいつ書いたか分からない。

そんな書評がおそらく五〇ぐらいあるはずです。

そういえば、共同通信では川村湊と交代で、私が「山」、川村が「川」でミステリーのことを連載して、のちに『ミステリーランドの人々』（作品社、一九八九年）という本になりました。その他、池内紀さんとも一緒に書いて、のちに『うその学校』（筑摩書房、一九九四年）になりました。それから藤森照信、柏木博、布野修司の三氏と一年かけて戦後建築の代表作について連載しました。でも、書評となると、何を書いたのか全然覚えていない（笑）。

――ここまでおうかがいしただけで、本と人のつながりが方々に伸びていき、本書につながる書評の山脈をなしていく感じがします。

松山　もともと私が最初に始めたのは、写真集の書評です。そのあと『乱歩と東京――1920　都市の貌』（PARCO出版、一九八四年）を出して、読売新聞の読書委員に招かれました。この本は評判になって、建築や都市、特に東京論への興味が高まった。だから私は建築や都市についての書評を書かされたのですが、その頃は匿名ですから名前は出ない。でも読み返してみると、自分が書いたものはこれだとわかります。

読売の読書委員に招かれて、東京の本社を訪ねた時に入ったのは、小さな会議室で、いちばん左端に川村二郎さん、次に日野啓三さんが座っていたことをよく覚えています。ビールが置いてあって、右の端には阿部謹也さんがいた。その年に私と一緒に読書委員になったのは、経済学の佐伯啓思さんと民俗学の小松和彦さんでした。その前年からは池澤夏樹さんがいました。

三カ月ぐらいたった頃から、飲まないで帰るのはおかしい、みんなで飲みに行こうという話になり、お酒の好きな川村さんや哲学者の木田元さんたちと飲みにいくようになりました。そうして三年ほど読書委員をして、終わったと思ったら、こんどは毎日新聞から連絡があり、書評委員になりました。そこで須賀敦子さん、高田宏さんと親しくなりました。そのあと朝日新聞の書評委員に招かれて、木田元さんと再会し、久世光彦さんとも出会いました。

各紙の書評委員会は少しずつ違いますが、読売の時は読むべき本を各自が持ち帰って読み、次の会で読み合わせをして、本についてみんなで言い合う。その時のことでいちばんよく思い出すのが川村二郎さんです。川村さんは言葉にものすごく厳しい人で、「これは日本語ですか」「こんなものを出すべきではないです」と平気で言いますからね。それをかいくぐって書評するのがまた醍醐味でしたが、川村さんや粟津則雄さんが「これは面白いから松山さんが書評したら」と言うこともありました。朝日の場合はそうではなく、二重丸を付けた人どうしの争いになり、その時に初めて、なんで自分がこの本の書評をしたいかを言い合う。それから朝日の場合は批判することができない。私が書評に値しないと思っても、それは言えないんですね。各紙で進め方が少し違う。

読売の読書委員になった時、経済学や経済史の本は書評対象としてありましたが、経営論はなかった。ところが、ある時期から突然増えていきました。

――八〇年後半のバブル期という時代背景もあったのでしょうか。

松山　そうですね。だから本によって、逆にその時代に何が出てきたかがわかりますし、書評もずいぶん変わりましたね。私は最初の頃は都市や建築の本を書評しましたが、だんだん文学の書評をするようになりました。

日野さんというのは面白い人で、誰にでも「小説を書け」と言うんです。池澤さんも詩人だったのが、日野さんに口説かれて『スティル・ライフ』を書いた。それが芥川賞をとったわけです。どうしてだかわからないけれど、私にも「小説を書け」と言うわけですよ。

――最初の小説『闇のなかの石』（文藝春秋、一九九五年）は、日野さんの慫慂だったのですね。

松山　ええ、ですから日野さん、それから川村さんにはずいぶん影響を受けました。

書評をするなかでいろんなことがあって、妙に業界のことにも詳しくなったのですが、そういうこと以上に、文芸畑の人たちに出会ったことは大きかったです。須賀さんとも毎日の書評委員で知り合って、一緒に酒を飲んで、とても面白かった。書評委員を辞めた後も、須賀さんとは会うようになりました。

――須賀さんのことを『須賀敦子が歩いた道』（新潮社、二〇〇九年）や『須賀敦子の方へ』（新潮社、二〇一四年）に書かれています。

松山　本当はもっとやろうと思ったんですが、パリやアルザスに行かなければいけないでしょう。でも肉体的にもちょっと無理です。

その他、読売の読書委員には他に篠田一士さんがいました。篠田さんはいつも、ぐでんぐでんに酔っぱらって来る。ものすごく大きな声だったので、隣で読売の偉い人たちが会議をしていた時、たぶん部長や局長クラスの人たちだと思うんですが、こっちへ来て「声が大きいから静かにして」と言った。でも篠田さんは全く動じず、「てめえらもでかい声でやればいいんだ」と言い返したんですよ。おかしくてしようがなかったですね。

日本近代をテーマにした仕事と書評

――『乱歩と東京』をはじめとして、建築や都市と文学が交錯する領域に関心を注いでこられました。

【2面へ……】

主な目次

主な書評　3～6面

山田稔『こないだ』（北村知之）
涸沢純平『やちまたの人』（川上登）
清田政信『渚に立つ』（神山睦美）
円城塔『文字渦』（澤西祐典）
F・マクラウド／W・シャープ『夢のウラド』（岡和田晃）
土田知則『ポール・ド・マンの戦争』（鈴木英明）
キム・エラン他『目の眩んだ者たちの国家』（金成玟）
西山美久『ロシアの愛国主義』（山本健三）
松原仁美『排除と包摂のフランス』（天野敏昭）
小関隆『アイルランド革命 1913-23』（崎山直樹）
石井正己編『菅江真澄が見た日本』他（野本寛一）
大城貞俊『六月二十三日　アイエナー沖縄』（小嶋洋輔）
佐野魁『二頭の馬の伝説』（村木哲）
R・ブリビエスカズ『男たちよ、ウエストが気になり始めたら、進化論に訊け！』（大野秀樹）
楪博行『クラス・アクションの研究』（川成洋）
連載（伊達政保、秋竜山、中村隆之、睡蓮みどり、ベイベー関根、平井倫行）

図書新聞
直接定期購読を
一年（48週）　12,000円
半年（24週）　6,480円
※送料・税込
毎週ご自宅までお届けいたします。
はがき、TEL、ファックス、メールにて下記までお申し込み下さい。
※海外での定期購読をご希望される方はご相談下さい。
◆お申し込み・お問い合わせ
〒169-0075 東京都新宿区高田馬場3-13-1 ノークビル3F　武久出版（株）
図書新聞　定期購読係
TEL03(5937)3918　FAX03(5937)3919
E-mail info@toshoshimbun.com
http://toshoshimbun.jp